

校長室だより

共学共高

第
51
号

令和5年6月10日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

教育実習生の研究授業 part4

教育実習生の研究授業の最終報告である。

まずは、1年6組の「歴史総合」の授業である。ICTを活用してスライドとプリントを進めていく授業である。はじめに、授業の主題が提示される。「明治政府はどのような国づくりを進めたのだろうか」そのことを理解する授業なのだ。そこへのプロセスとして、「五か条の誓文」「太政官制」「一世一元制」や「版籍奉還」「廃藩置県」「四民平等」「地租改正」といった施策等を学ぶことを経て、明治政府の諸改革がどのような国づくりにつながったのかを論理的に考えることができる力を身に付けてもらう意図で、授業が展開されていく。

途中で、生徒各自がiPadを使って、「天皇」や「血税」について調べ、それを全体で共有する取組もなされている。また、「地券」や「地租改正に対する一揆の様子」などを表した資料をホワイトボードに提示して、よりわかりやすくする工夫もされている。

最も感心したのは、生徒たちに対する2つの問いかけである。一つはワークと称して、2～3人のグループをつくり、教科書に掲載されている「地租改正」のトピックスを読んで、「地租改正が民衆に与えた影響について考えさせる」ところだ。生徒たちはしっかりと対話をしているが、どのように考えたのかクラス内全体で表現させ、共有させる場面がなかったのは惜しまれる。次に、トライと称して、5～6人のグループをつくり、「新政府の改革を民衆の立場で採点（5点満点）して、その理由を話し合う」取組である。こちらも生徒たちは積極的に意見交換している。実習生が一つの班を指名して、発表させる。生徒は、「2点。国自体は安定したが、民衆の負担が大きくメリットが少なかったから」と答える。周囲から拍手が起きる。端的に全体像をとらえているな、と感じた。ひとくくりの時代を俯瞰して、どういう時代であったのか、捉えることのできる歴史認識や歴史的思考力を培うことがまさに求められているのだと思う。実習生の取組は、いい挑戦であった。



続いて、2年2組の「英語コミュニケーションⅡ」の授業である。

前回までに学習した Lesson 3 の要約となる問題の解答を指名された生徒が、次々に解答していく。内容はラグビーで有名なマイケル・リーチ選手に関するものである。16名の生徒が指名されたが、全員が正解を答えている。

続いて、新しい Lesson 4 に入っていく。実習生が「Vending Machines」と電子ボードに記入し、「これが何か想像つきますか？」と投げかけるところから始まり、「では、日本にはどれくらいの数の自動販売機があるのでしょうか？」という投げかけに対して、ペアで話し合う。指名された生徒は「1億台」と答えたが、実際には400万台のようだ。私にはまったく想像がつかない。

次に、新出単語の確認をしていく。1回目は英語のみが電子ボードに表示され、CDの音声が続いて、生徒たちが声をそろえて発音する。2回目は英語の次に日本語も提示され、同様のことを繰り返す。

その後、本文の音声をCDで聴き、読み方の難しいところを各自でチェックしていく。続いて、フレーズごとに区切ってCD音声が続いてコーラスリーディングしていく。そして、本文の和訳を実習生に指名された生徒が、答えていく。内容としては、日本に来る外国人観光客が驚くのは、道端や公園など、外国では破壊されてしまう恐れのある公共の場所に、自動販売機が置かれていること、また、ホットとコールドの両方が同じ自動販売機で売られていること、といったものである。

まとめとして、内容把握のためにある教科書の設問に解答して、それが全体の前で明らかにされて終了である。実習生と生徒との個別のやりとりがふんだんにある授業で、一方通行ではないところがよい。あとは、本文の和訳の際に、いかにvividな展開にしていくか工夫すると、より良くなるのではないだろうか。



教育実習も今日で終わりである。母校での実習はどうであっただろうか。在校生ときには見えなかった数多くのことがあったと思う。わずか50分の授業を準備するのに、どれだけの時間を要するのか、授業だけではない教師の仕事の数々、そして教師がどのような想いで生徒たちと接しているか等々。概して外国の教師と日本の教師との相違は、日本では全人教育に携わっているところにあると私は考えている。海外では、教師の仕事は授業だけということが多い。面談や部活動、進路指導などはそれぞれの専門の担当者が行うといった具合だ。日本の良さは、様々な場面をとおして生徒たちの様々な姿に触れ、学力形成だけではない、人間形成にも携わっていくところにある。私自身、高校2年・3年と担任をしていただいたH先生との出会いがなかったら、今の私はないと考えている。どういう大人と出会うかによって、生徒たちの人生は変わっていくのである。

教職に魅力を感じる人たちに、これからの教育を担って行ってほしい、と願う。(おわり)

(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)